

ハンゲルとの出会い

瀬崎 明（会員）



なおも10年が過ぎた昭和40年は、平和で安定した20年間が続く間に戦いの傷跡の多くが消えていた。昭和30年代に米国との安全保障条約が反対の嵐の中で締結され、十数万人のデモ隊が国会を取り巻いた安保闘争も一区切りとなり、経済活況の中で社会も落ち着

戦後10年が過ぎ、「もはや戦後ではない」と時の政府は高らかに経済白書で言した。都市では戦災の焼け野が原も次第に姿を消し、国内の産業も順調な復興の兆しを呈していた。

年の瀬も迫る1956年12月26日、舞鶴は大雪が舞っていた。シベリア抑留者を待ち侘びる大勢の抑留者の父、母、妻、子どもたちが日の丸を手に手に岸壁を埋め尽くしていた。ソ連ナホトカからの最後の引揚船興安丸が真っ白な雪に覆われた島々を抜け大きく霧笛を鳴らし着岸した。その船に十数年のシベリア抑留を生きた千名ほどの最後の抑留者たちが乗船していた。その中に父がいた。

「国民（くにたみ）」とともにここをいたためつつ 帰りこぬ人を ただ待ちに待つ」

我が家の粗末な壁に貼られた昭和天皇

の色紙の下に、ホロンバイル高原を背にして馬に跨がり胸を張った協和服姿の父の写真があった。

3歳で別れたきりで記憶もなく初めて会う父だった。真っ黒な厚手の外套に押し潰されそうな体は痩せ衰え、皺だらけの顔に栄養失調で象牙質だけが残った歯が爪楊枝のように見える父だった。その姿は子ども心に思い浮かべていた父からは想像の域を遠く離れていた。

引き揚げ桟橋を踏みしめるように歩く父の肩に担がれた大袋の中は、ロシア製の缶詰で溢れていた。敗戦で何もない国の飢えた我が子たちのためにと、帰国時に買い集めたものであったろう。

我が家の戦後はそのときにやっと終わった。しかし、折角の缶詰はだれも手を出さず、いつまでも台所の片隅に積まれていた。

きを取り戻していた。しかし、大学だけは隔絶されたようデモ騒ぎは収まる様子がなかった。校内での騒乱から政府攻撃など、首都近郊の学生デモ隊が様々なシュプレヒコールをあげながら中央官庁が集まる霞が関に繰り出していた。

東京オリンピックの年だった。学生運動と縁のなかった私は、当時有名だった小田実の著書『何でも見てやろう』に触発され、百ドルを手に貨物船でインドシナ半島の旅行に出かけた。

港湾荷役のアルバイトで貯めた金で安い船賃を求めた。乗船したのは、建造後半世紀を過ぎた4千トンの香港船籍の貨物船「海利（HAILIE）」だった。

時代を経たリベット結合の錆だらけの鉄船は玄界灘を過ぎると間もなく低気圧に沈み出くわした。嵐に見舞われて波間に沈む

ごとに、船底近くの3等船室（最も他には客室はなく客も私1人だったが）の丸窓からは真っ青な水が見えるだけだった。まるで水族館にいるようだったが、残念ながら魚影はなかった。

船酔いで食事も取れなかった嵐に翻弄された日は幸いにして1日で過ぎ去り、その後は雲1つない真っ青な海を見ながらイルカと競争し、順風を得て香港に到着した。

最初に踏んだ異国の地の香港で有名な観光地ビクトリアピークに歩いて登った。そこで1週間足らず船で過ごしただけに、足が衰えているのに驚いた。

この寄港地では同年配の香港人の同室を得た。彼は2段ベッドの上段の客となった。年を聞くと同年だった。シンガポールのプラスチック工場に勤めるための初渡航とのことであった。お互いに英語が不自由で筆談だったが、長旅の話し相手のできたのは嬉しかった。

次に上陸したのは南ベトナムの首都サイゴン（現ホーチミン）であった。ベトナムは、フランスとの独立戦争を経て植民地支配を脱したが、その後、大国の思惑で国を南北に分けて戦火を交えていた。この戦争は周辺国を巻き込みインドシナ半島での紛争の火種ともなっていた。自

由圏と共産圏の利害を賭けた世界規模の対立の最前線がベトナムであった。

現地の惨状を世界に知らせようと多くのカメラマンが命懸けで戦場を駆け巡っていた。伝説のカメラマンとなったロバート・キャパ、ロバート・キャパ賞やピューリッツァー賞を得た日本人カメラマン澤田教一などはいずれもベトナムで命を落とした。2018年10月ゲリラに解放され、シリアで捕虜となっていた安田純平さんに向けられた自己責任論などは議論にもならない時代だった。

湿地帯の広がるクリークに囲まれた首都は、彩色豊かな看板が隙間もなく軒に並び、マーケットを巡ると南国の果実や野菜を売る店、宝石商、土産物屋などがひしめいていた。市民は賑やかに街にあふれ、戦争の影は何処にも見えなかった。少し郊外も見てみようとサイゴン川をフェリーで渡った。そこにも新聞で見た戦場の風景はなく、小さな街並の先には水田が広がっていた。クリークには数頭の水牛が水面から鼻だけを出してのんびりと水に浸かっていた。

遠くクリーク越しに見た国道には幾台もの車が埃をまきあげて走っていた。その中の1台は日の丸が描かれた真っ赤なジープだった。「こんな危険なところで

日本人が活躍しているのか」と驚いた。

海利号をシンガポールで離船して汽車でマレーシアの首都KL（クアラルンプール）へ、そこで新年を迎え、大学の期末試験までに何とか帰国しようと持っていたカメラや時計などの金目のものはすべて売って帰途の船賃に換えた。シンガポール港で乗った船はフランスがベトナム植民地時代から運行していたフランス郵船所有の大型客船ミス・ベトナムだった。フランスと日本を結ぶこの旅客船の寄港地がサイゴンだったために再び南ベトナムに上陸する機会を得た。

数か月ぶりにサイゴン市内を歩いて目にしたのは、クーデターによる市街戦によって大統領官邸の塀に穿たれた無数の銃弾跡だった。街の中心部では、サムロに爆弾を積んで突っ込む南ベトナム解放戦線の自爆攻撃によって全ての床が吹き飛んで柱だけが残る7階建てのビルの残骸が生々しかった。

翌年の卒業時には就職先として海外に出られる会社への就職を考えた。真っ先に浮かんできたのは、ベトナムの貧乏旅行で見たジープの光景だった。その会社を調べてみると、社員をベトナムや他の東南アジア諸国に派遣していることで有名だった。

東南アジアでダムや道路建設などに建

た。諸先輩の積年の偉業が見られる隣国の土を踏んだのは、入社から既に10年が経っていた。

新入社員時代に労働組合で五役の末席にいたときだった。韓国と台湾は旧植民地国との位置付けで、海外勤務手当が他国の半額しか支給されていなかった。これは理不尽な規定だと会社中に申し入れ、他と同様の手当に変わったが、そのときは東南アジアを目指した自分がその恩恵を受けるとは考えもしなかった。

韓国は前大統領朴槿恵氏の父で朴正熙大統領の時代だった。羽田空港を飛び立ってソウルの金浦空港までの飛行時間は2時間足らずで、沖縄よりも近い外国だった。金浦空港から大河・漢江を超えた首都ソウルは、車で数十分の距離だった。人で混み合う街には初めて目にするハンゲルの看板が溢れていて読めず、漢字で書かれた看板だけが頼りだった。

朝鮮半島では、15世紀半ばまで、自民族の言語である朝鮮語を表記する固有の文字を持たず、知識層は漢字を使用していた。李王朝4代目の世宗が文盲の多い庶民が文字を学びやすいようにとこの文字を作ったことである。

その頒布には漢字を知る両班（貴族階級）の特権意識の反発があったと歴史に

記されている。奴隷制度まであった当時の朝鮮では、庶民に読み書きの知識を与えては身分制度を覆すとの支配層の危惧があったようだ。

漢字以外ではアルファベットでできている外国語の知識しか持っていなかった私には、見慣れないハンゲルに戸惑った。しかし、簡単に覚えられる文字と話を聞



大淸ダム：向かって左側がコンクリートダム、右側がロックフィルダム、中央で一体化している。発電量は9万kw

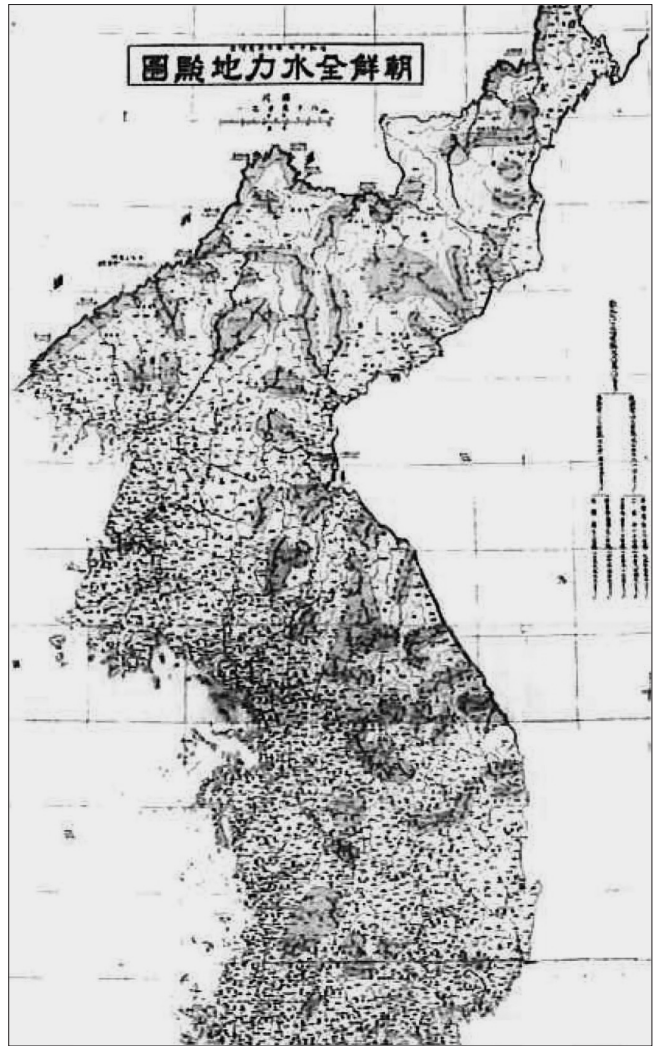
いて学んでみると、記憶力不足の私でも1日程度で読み書きを覚えることができて驚いた。

食でも驚きがあった。ソウル事務所から近い飲食店街に数名で昼食に行った。日本では高価であり口にできないステーキだが、おすすめだと言われてステーキ定食を頼んだ。目を疑うほど分厚い牛肉が鉄板の上で焼かれた。柔らかく美味いステーキに舌鼓を打ったが、支払いでその値段の安さに感動した。

目指す大淸ダムは南北に長い韓国の中央部にある忠清南道にあった。ダムは道都大田（テジョン）を流れる錦江の中流に計画されていた。現地は大田市の中心街から車で30分ほどの近いところにあった。

朝鮮半島での水力開発は戦前に東洋一を誇った満州との国境に建設された水豊ダム（70万kw）を始めとし160万kwの水力が開発されていた。これらの水力発電所の多くが現在の北朝鮮に存在する。さらに建設中のものが約100万kwあった。戦後に韓国で建設されたものが揚水発電所を除くと約100万kw程度である。朝鮮戦争勃発時は北が工業国で南は農業国であった。エネルギー基盤である発電力の差が緒戦で瞬く間に釜山まで北が押し寄せた一因であったようだ。

私が滞在した大田市は韓国3番目の大都市であり当時でも人口50万人を超えていた。交通路は韓国の南北を結ぶ鉄道幹線の京釜線（ソウル―釜山）が走っていたが、大田に行くには米国グレーハウンド社の経営する近代的な高速バスが便利であった。4時間以上かかる鉄道に対して高速バスに乗るとわずか2時間でしかも便が頻繁にあった。仕事の打ち合わせでソウルと現場を往復するのは、もっぱら利便性の高いバスを利用し汽車に乗る



図は1917年に日本が調査した水力開発拠点

のは稀だった。当時の京釜線は石炭焚き汽車に曳かれた奇麗とは言えない車両で、室内も粗末な上に列車の本数も少なかった。しかも、到着地点の西大田駅は市の中心から離れて不便だったこともバスを使う理由だった。

初めて見るダムサイトの錦江は、川幅が広い上に堰堤も高く積まれ、漢江同様に大陸を流れる河は日本と比べるべくもない大河だと感動した。先輩たちが戦後になり韓国に業務を得て入国し（朝鮮電業

経験者にとっては戻ってというべきだろうが）真っ先にダムの調査を行ったのが韓国三大河川の漢江、錦江と洛東江だった。私が韓国のダムプロジェクトに参加した際は、漢江流域で春川ダム、衣岩ダム、昭陽江ダムなどの建設が終わり、錦江で大清ダムが始まり、洛東江は洛東江ダムの計画と調査が実施されていた。

大清ダムでは設計が完成し着工に向けた地質精査が行われていた。私の担当は施工計画と施工機械の入札書作成だった。ダムの形式は特殊なもので、岩盤が強くであった左側のコンクリート重力式ダムと岩盤強度が小さい右側のロックフィルダムを中央で繋いだ稀な形式だった。このため、岩石運搬の大型建設機械とコンクリートダム打設のための大型設備が必要とされた。

建設が最盛期に入った際のことであるが、50万立方メートルのコンクリート打設に必要なセメントを政府が国内で確保せずに外貨稼ぎのために輸出に回したことで、肝心なセメントがないと大騒ぎになった。

また、大量の岩石採取にはダイナマイトが必要であるが、戦時体制であるために入手と保管に大変な努力が必要でもあった。当時の朝鮮半島は北と南の政府が38度

線を挟んで休戦状態にあり、緊張対峙する前線では時々国境での発砲事件も起きていたために火薬の取り締まりは格段に厳重だった。

戦時体制の韓国政府は、首都がソウルでは国境に近すぎると、首都機能をより安全な後方の大田市に分散することを決めていた。その政府の方針に真っ先に賛同して移転した政府機関が産業インフラを建設する産業基地開発公社であった。この公社がダム開発で我々コンサルタントを雇用した客先で、本社は大田市の中心街に位置していた。ただし、多くの職員が未だにソウルに妻子を残して二重生活を続けていたのは都を離れ田舎に住む生活への不安があったようだ。

錦江は水が透き通ったきれいな大河であった。しかし、「水清ければ魚住まず」と言うように魚影が少なかった。対岸に川宿があり魚を食べさせると聞き、行って見た。ソガリと呼ぶ大型のハゼに似た魚をキムチ鍋で食べさせる店だった。

清流には鮎が住むのではないかと思いついてみたがそんなものはいないとのこと。海、川、陸すらものともしないウナギさえも見えないと言う。

百済（ペクチェ）時代の最後の都・扶余（プヨ）があった錦江河口（7世紀の

天智天皇の時代に援軍を送った白村江の戦いはここで起こったと言われている）の黄海は水深が最大でも40メートルを超えない浅海で、干満の差は10数メートルと大きいことで魚の遡上に適さないらしい。

ダムサイトの美湖里は、地名があらわす通り春になると多彩なつつじが見渡す限りの丘陵を埋めて咲く美しい場所であった。目撃したことはないが、賄いのアジュマ（おばさん）の話では山奥には虎が住んでいて時々降りて来るので寮で飼っている犬が怯えるとのことだった。

この現場駐在の後には、ミャンマー、タイ、フィリピンなど、私は東南アジアでの仕事が続き、韓国を訪ねる機会がなく、次に訪れるまで30数年が経過していた。ソウルと釜山を結ぶ新幹線が完成し、錦江に渡る際に車窓から垣間見たダムサイトは近代的なビルが立ち並ぶ大都市に変貌していた。

協会に入会し「善隣」誌の編集に携わる委員となり、委員長の原田克子氏と知り合った。そこでお互いが大田市にいたことがあると知り奇遇に驚いた。原田さんは大田の大学に留学していたとのことであった。ソウルならいざ知らず田舎町である（最も韓国3番目の都市ではあるが）。滞在した時期も原田さんは私の駐

在時より少し遅れているがほぼ同じ時代であった。当時の韓国には夜11時以降は外出禁止令があった戦時下でもあり、日本人の留学生はソウルでも少なかったと思う。まして、大田での女子留学生は多分初めてではないかと想像する。私がいた頃は市内に他の日本人がいることすら聞いたことがなかった。

お互いに馴染みがある隣国・韓国との友好を深めようと相談しているが、残念ながら国際善隣協会は隣国として話題に上がるのは中国であり、韓国、台湾は忘れられている。多分、協会の創立期には両国が日本領土とされていたことに起因するであろうが、善隣協会とうたうならば忘れられている両国との善隣協力についても大いに進めるべきかと愚考する。

また、慰安婦や徴用工問題などで韓国との関係が怪しげな気配であるが、韓国人の友人が多い身としては双方の過敏な対応に危惧を感じる。お互い知り合えばごく普通の隣人であるし、共有する文化と歴史も深い。

ただし、我々日本人が忘れがちな、加害者と被害者の立場には、理屈を抜きにした大きな違いがあることを肝に銘じるべきかと思う。

（2018年11月記）